伊藤　めぐみ　*ITŌ Megumi*

《査読論文》

「陸軍花嫁学校」の発生と展開
――日本婦道講習会の歴史的経緯と講習内容を手がかりとして――

The Genesis and Development of the Army Finishing School: A History of The Nihon Fudō Kōshūkai (Society for Japanese Women's Morality) and an Analysis of its Lectures

Key words: Japanese Women's Morality 日本婦道, finishing schools 花嫁学校, women's education 女子教育, Imperial Way 皇道, motherhood 母性

This article takes up the subject of prewar finishing schools, focusing on the so-called Rikugun Hanayome Gakkō (Army Finishing School), properly known as the Nihon Fudō Kōshūkai (Society for Japanese Women's Morality), and discusses the Society's founding, curriculum, and distinctive features. The Nihon Fudō Kōshūkai was founded in 1935 for the express purpose of supporting the Imperial Japanese Army. Its principal focus was unmarried daughters and graduates of higher women's schools from families of commissioned officers. The courses took place at the Seiwa Gakuen, a Buddhist establishment headed by Komatsu Chisa (1893–1974). There were many courses of a spiritual and ideological nature, such as "education by doing," rooted in Buddhist spirituality.

Focusing on the lectures of Komatsu and Nakai Ryōtarō (1887–1953) of the Imperial Japanese Army, who were responsible for most of the lectures, I analyze so-called "Japanese women's virtues." What linked

the “Japanese women’s virtues” that both Nakai and Komatsu espoused was women as imperial subjects: their duties were to support the emperor system and the war effort by defending the homes that were the basis of the nation, and to give birth to and raise good, loyal imperial subjects. To that end, they stressed the cultivation of *bosei*, “motherhood.” In practice, this meant remaining at home, learning modern methods of household management and child-raising, and becoming “good wives and wise mothers” who epitomized the spirit of the “Imperial Way” (*kōdō*). Nakai also argued that women should be prepared to do battle, whereas Komatsu emphasized the relationship between Buddhism and the emperor system.

はじめに

本稿の目的は、「陸軍花嫁学校」と呼ばれた日本婦道講習会を戦前の代表的な「花嫁学校」の一つとして捉え、その歴史的経緯および内容を明らかにすることにある。

日本婦道講習会（以下、婦道講習会）は、陸軍の後援のもと財団法人義済会が主催し、1935年から開始された。目的は日本固有の「婦徳」を涵養することであり、対象は、将校の遺族および在郷・現役将校の令嬢、高等女学校卒業以上の学力のある者であった。また、聴講員として主婦も受け入れた。開催場所は東京にあった聖和学苑、学苑長は小松千渉（以下、小松）である。会費は無料であった（『東京日日新聞』35年４月14日）。

婦道講習会は「全国から押しよせた軍人未来の妻　陸軍花嫁学校素晴らしい人気」（『大阪毎日新聞』同年５月３日）、「陸軍花嫁学校　開く」（『東京朝日新聞』同年５月15日）というように、「陸軍花嫁学校」という俗称を新聞、雑誌などのメディアによって付けられ、その動向が盛んに報道された。

女子中等教育機関である高等女学校をはじめとして、当時の女子教育の目標

は良妻賢母養成であり、その意味では「女子教育機関の殆ど大部分は花嫁学校」と言える。そのなかでも、特に「花嫁学校」の俗称が与えられた「一群」の女子教育機関がなぜ登場したのか。その理由を古木弘造は、多くの女子教育機関が良妻賢母教育に充分な効果をあげていないためであり、「一層良妻賢母養成に役立つ教育機関が必要であるとして来た事を暗示するもの」と説明する。古木は教育科学研究会家事教育委員会のメンバーで、「花嫁学校」の動向を考察した人物である。彼は「花嫁学校」を、「比較的短期間に良妻賢母の仕上げをなす所、其処を卒へれば、直ちに立派な花嫁になれる―いはゞ、花嫁養成を直接目的とする所」と定義しており[1]、筆者もこの定義を採用する。

筆者は「花嫁学校」は、結婚して良妻賢母となるのが女性の役割であり、そのためにより実践的な教育が必要であるという考えのもと設立され、ジェンダー規範を強化するものとして機能したゆえ、良妻賢母教育の歴史を考える上で欠かせない存在と考える。しかし、正規の学校教育体系に入らない機関であり、一次資料も乏しい。

古木は、文部省が家庭教育振興を図るために組織した大日本連合婦人会が1932年に設立した御茶の水家庭寮を「花嫁学校」の「元祖」としてあげている。御茶の水家庭寮は、「女学校を卒業して近く結婚し、新たに家庭生活に入ろう」という主に中産階級の女性たちを対象とした機関として登場し、「花嫁学校」の「流行時代を招来する源」となり、その後「多種多様」な「花嫁学校」が設立されていくという。しかし、「花嫁学校」に関する先行研究の中心は、満洲へ送り込まれた男性農業移民の配偶者養成を目的とした、「大陸の花嫁学校」である[2]。

御茶の水家庭寮など、他の「花嫁学校」研究はほとんどない[3]。

---

[1] 古木弘造「『花嫁学校』の反省」『教育思潮研究』第13巻第1号、1939、177～182頁。
[2] 陳野守正『大陸の花嫁』梨の木舎、1992、相場和彦他著『満州「大陸の花嫁」はどうつくられたか』（明石書店、1996）、杉山春『満州女塾』（新曜社、1996）、東京の満蒙開拓団を知る会『東京満蒙開拓団』（ゆまに書房、2012）等。

筆者は、戦前の「花嫁学校」の動向を明らかにしていくことは、先行研究の少ない中産階級を中心とした高等女学校卒者を対象とした女子青年教育の一端を明らかにするという意義があると考える。これまで筆者は、新聞、婦人雑誌、書籍などに掲載された「花嫁学校」関連の記事の収集を行い、それらを用いて、御茶の水家庭寮、次いで御茶の水家庭寮とともに報道されることの多かった警察官家庭婦人協会家庭学校の研究を行った[4]。

本稿では、「陸軍花嫁学校」として知られた、婦道講習会を取り上げる。婦道講習会は、将校家庭の未婚女性を主たる対象とし、戦時体制を支える軍人家庭の主婦育成を目的とした軍隊による社会教育機関として捉えることができる。

ここでは、第１回の内容を収録した『日本婦道講座』(1935年、全６巻、婦女界社)、小松が活躍した仏教女子青年会の機関誌『アカツキ』他、当時の新聞や婦人雑誌を史料として、婦道講習会の詳細を明らかにし、本教育機関を通じてどのような「花嫁」を育成しようとしたのか、「日本婦道」とは何かを考察したい。特に、講義を多く担当した小松と陸軍省人事局恩賞課長中井良太郎大佐（以下、中井）の論に焦点を絞る。

---

[3] 今川勲『現代結婚考』(田畑書店、1990)、常見育男『家庭科教育史増補版』(光生館、1976)、田嶋一「共同体の解体と〈青年〉の出現」中内敏夫他『教育―誕生と終焉』(藤原書店、1993)、野田満智子「家庭科教育史における家庭寮教育の系譜」(第三報)『日本家庭科教育学会誌』第26巻第３号（1983）では、御茶の水家庭寮等に言及しているが、まとまった研究ではない。

[4] 拙稿「大日本連合婦人会による家庭寮事業の展開―機関誌『家庭』の記事を中心に―」『総合女性史研究』第23号（2006、志村聡子と共著)、「大日本連合婦人会による花嫁学校」日本女性学習財団『女性の学びを拓く』(ドメス出版、2011)、「戦時下における警察官家庭婦人協会家庭学校の活動」『総合女性史研究』第30号（2013)、「戦間期における『花嫁学校』の生成と展開」『早稲田大学教育学研究』第４号（2013)、「戦時下における『大陸の花嫁』」(小林・村田・弓削編『ジェンダー研究／教育の深化の為に』彩流社、2016)。

Ⅰ　財団法人義済会と小松千渉・聖和学苑

まず、婦道講習会を主催した財団法人義済会（以下、義済会）と開催場所の聖和学苑および小松について述べていく。

1　財団法人義済会と陸軍将校

義済会は陸軍将校[5]の共済的な組織である。現役将校の親睦団体である偕行社の附属事業として、1919年に設立された。目的は、困窮状況にあった在郷将校および将校の遺族を様々な事業を通して援助することである。在郷将校とは、現役将校を辞めて、一般市民として地域社会で生活している将校たちである。25年に偕行社から独立し、財団法人義済会となった[6]。

なお、婦道講習会の申し込み先は、陸軍省人事局内退職武官講習会（『日本婦人』36・4）[7]である。義済会は中等教員養成講習などの各種講習会を開催しており、そのための事務所を人事局内に設けていた[8]。

2　小松千渉と聖和学苑

聖和学苑の所在地は、東京市渋谷区千駄ヶ谷5ノ902（以下、千駄ヶ谷、現在の代々木2丁目）である。もとは仏教学で高名な高楠順次郎博士（以下、高楠）の旧邸があった。高楠は女学校とともに仏教女子青年会（以下、女子青年会）を設立し、女性の教育に力を注いだ。小松は女子青年会の活動に携わり、

5　軍人の階級は16階級あり、最も上の大将から中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉までの9階級が将校である。

6　義済会編『財団法人義済会沿革史』義済会、1929、5頁、31～47頁。

7　新聞・雑誌の記事を引用した場合は煩雑さを避けるため、文中に引用箇所の最後に（新聞名、雑誌名）とし、次いで年月日（雑誌は年と月号）を記載する。同じ年の場合、年は省略する。

8　『陸海軍軍事年鑑　昭和12年』軍人会館出版部、1936、595頁。

さらに聖和学苑を設立する。

以下、高楠および女子青年会の活動、次いで小松が聖和学苑設立に至る経緯を述べる。

（1）高楠順次郎博士と仏教女子青年会

高楠（1866-1945）は、広島県の沢井家に生まれ、西本願寺普通教校を卒業後、高楠家の養子となる。1890年、英オックスフォード大学に留学、マックス・ミュラーの指導下で印度学を学び、その後独、仏にも留学する。帰国後、99年東京帝国大学・文科大学教授（1927年まで）となり、日本の印度学・仏教学を世界水準に発展させた。東京外国語学校校長を兼任し、退官後は東洋大学学長（31-34年）を務めた。武蔵野大学（旧武蔵野女子大学）の建学の祖でもある[9]。以上のような教育者としての活動とともに、学術書の刊行・編纂、仏教関係の雑誌の刊行、各種組織の創立への参加など様々な活動を展開した高楠[10]は、仏教界以外にも人脈を築いていた。

高楠は「仏教主義に基底する女子教育の理想を実現するため」[11]、1924年3月に武蔵野女子学院（現武蔵野女子学院中学校・高校）を設立する。さらに、同年4月に「仏教精神の自覚に立つ」仏教女子青年会（以下、女子青年会）を結成、会長に就任し、女子社会教育活動にも乗り出す。目的は家庭の浄化、社会の廓清、女性教育の完成、女性関係事業の促進などであり[12]、「幹部には青年女子を指導するリーダー格の仏縁深い婦人」が多数参加した[13]。会員数は

---

[9] 武蔵野女子大学・仏教文化研究所編『雪頂・高楠順次郎の研究　その生涯と事績』大東出版社、1979。

[10] 石上和敬他「高楠順次郎とその時代―新出資料の紹介を中心に―」『宗教研究』89巻別冊、2016、126～133頁。

[11] 前掲『雪頂・高楠順次郎の研究』97頁。

[12] 武蔵野女子大学学祖高楠順次郎研究会編著『高楠順次郎の教育理念』武蔵野女子学院、1999、87～88頁。

[13] 山本スギ「婦人の開眼②」『仏教タイムス』昭和54年3月5日。

550名ほどであった[14]。

女子青年会の事業は講演会、研究会の開催とともに、以下の３つが中心であった。第１は機関誌『アカツキ』の発行（1925年１月～41年10月）、第２は高楠が千駄ヶ谷の自邸を提供して26年に開設した、女子学生のための暁紅寮の運営である（『読売』26・10・４、『同』29・４・12）。寮は31年に移転（『アカツキ』31・６）する。第３は、28年に富士山麓の玉穂村（現御殿場市）に開いた女性のための修養施設、富士休養学園楽山荘の運営（『読売』28・９・15）であった。

（２）小松の聖和学苑設立までの活動

小松の経歴を掲載した『婦女界』（35年10月号）の記事および令孫志賀直比古氏（元大阪大学特任教授）への聞き取り調査と提供資料によると、小松は1893年に大分県の医師の家に生まれた。本名は後藤敦子（志賀氏）である。結婚により静岡県に移る。1974年に80歳で逝去した。「仏教儒教の研究に没頭」した人物と評されている。

小松が高楠および女子青年会と深い関わりを持つ契機は、楽山荘の建設であった。高楠によれば、27年秋に「本会は新たなる闘将小松女史を迎え」る。小松は「静岡沼津地方を行脚して苦闘の結果、楽山荘新築を決心させるだけの財施をもたらした」（『アカツキ』33・１）と建設事業に多大な貢献をした。翌28年には女子青年会の主幹に就任し、『アカツキ』の編集顧問（『アカツキ』33・10）も務め、仏教に関する豊かな教養を持つ指導者として、活動に携わる。

さらに、小松は軍部が後援した大日本国防婦人会（32年設立、以下、国婦）[15]でも「創立当初よりの最高幹部として活躍」（『婦女界』35・10）したと

---

[14] 『婦人年鑑　昭和12年版』東京連合婦人会、1937、135頁。

[15] 「国防は台所から」をモットーにカッポウ着をそのシンボルとし、会員1000万人を擁する、戦前の３大婦人団体の一つとなる。藤井忠俊『国防婦人会』岩波新書、1985。

されている。例えば、36年９月に挙行された国婦清水支部結成式にて国婦会長の祝辞を代読し、式の後に「日本婦人道の真髄と国防」と題する講演を行っている[16]。

また、仏教主義に基づく幼児教育にも従事している。高楠は1931年に沼津市仏教会の設立した沼津ルンビニ幼稚園の教育顧問に就任、小松も本園の活動に携わっている[17]。翌32年には、千駄ヶ谷に小松が中心となってルンビニ幼稚園が創立され、高楠が園長に[18]、小松は幼稚園主事に就任する（『アカツキ』33・２）。

（３）聖和学苑・聖和女子高等学芸院の設立と経営

２年後の34年に、小松は「聖徳太子の御教を遵奉し、それを理想として」（『婦人と修養』）35・５）、聖和学苑を同地に設立、苑長となり、高等女学校卒者を対象とした聖和女子高等学芸院（以下、学芸院）を開校した。聖和寮を設置し（同前）、幼稚園を引き継いでいる[19]。

学芸院のパンフレットによると、設立の目的は「高等の学芸を修得せしめ、宗教的信念を基礎とし、精神生活を豊かならしめ、日本女性特有のよき素質を錬磨し」、「近代生活に即応せる科学的知識により生活の向上を計る」とある。本科（１年）と高等科（１年）があり、学課は教育、宗教、文学、芸術、家政、児童、保育の７分野である。宗教の科目欄には「仏教概説」（高楠）、「実践仏教」（小松）等と共に「国民思想」、「現代思想批判」もおかれている。高等科には「聖徳太子の仏教」が開講され、課外科目には哲学、宗教、教育、政治の思想史研究、儒教思想研究がある。全体に自由主義思想を批判的にみる姿勢が示されている。また、皇道精神に関する講師もおり、後述するように、小松は

16　清水市史編纂委員会編『清水市史』第3巻、清水市、1986、245頁。
17　高楠順次郎『道を求めて』大東出版社、1939、371頁。
18　武蔵野女子学院『武蔵野女子学院五十年史』武蔵野女子学院、1974、32頁。
19　吉村貫録『宗教界新風景』建設社、1935、256頁。

貞明皇后への報恩を学苑設立の理由にあげており、皇道精神の涵養は欠かせない目的であったと思われる。また、教育、児童、保育や「母性教育」（小松）という科目がおかれ、母としての知識を身につけることも重点がおかれている。「保育実習」も実施されている。

学芸院の特質は、裁縫・家政の基礎技能習得中心ではなく、仏教教育を中心に日本女性としての思想教育と母としての教養・実践力を身につけることに重点がおかれていることにある。あわせて近代的な生活の知識、技術、美的感覚も兼ね備えた女性の養成が目指されている。

Ⅱ　日本婦道講習会開催の経緯と理由

次に、なぜ婦道講習会が開始されたのか、考えてみたい。

１　「国防問題」から生じた精神教育の重要性

小松は婦女界社社長の都河竜に、以下のように婦道講習会開催の経緯を語っている。

いわく、国婦が会員を200万人近くに増やしていることからも、非常時の「国防問題は、婦人であっても決して忽せに」できない緊急の大問題であり、「精神教育の上から見た国防問題といふことは更に一層重要な意義を持つもの」である。

「これからの私の一生はこの精神教育、日本婦人の本当に進んでいくべき道、真の日本婦道といふことの為に捧げて行きたいと念じて」いたところ、「たまたま陸軍内部の教育の当路にあられる方の御意見と共鳴する所があって『それはよいことだ、その趣旨の下に講習会を開いて見ることにしよう』」というので、「私の学苑において開催する」ことになり、さらに、小松が「講習会全部のお膳立て」を引き受けたとしている（『婦人と修養』35・８臨時増刊号）。

2　女性の「思想」問題への対応

当時の義済会会長で婦道講習会の校長である大島健一中将（元陸軍大臣）の考えも見ておこう。彼は講習会の「挨拶」の中で、開催の背景と意図を以下のように述べている。

世界の現状は思想的にも経済的にも未曽有の混乱状態であり、「其の闘争は益々露骨」となってきている。日本は皇道精神をもって「東洋平和の確立と萬邦協和の促進に邁進」している。「男女相扶け」「皇国の興隆」をはかる重大な時期であるけれども、国内の状況をみると緊張は十分ではなく、女性も「一大覚悟を要すべき」である。「古来我国固有の婦道は家庭に修養して国家に奉仕し母として又妻女として貴き光を社会に放った」けれども「急激な物質文明の流入」が禍となり、「貴き婦人の思想」は「帰趨に迷い」、「徒に日月を空費」している人が多い[20]。

大島は、戦争への道を歩む状況を皇道精神のもとで「平和の確立」に「邁進」と表現し、そのために女性の「覚悟」も必要だという認識を示す。次いで我が国の女性の生き方は、家を中心に生き、母として妻として国家に貢献することであるという。しかし、大島にとって女性の現状は、「物質文明」に流され、道を見失うという嘆かわしいものであり、そのため「せめて吾人の同僚である将校家族に日本固有の婦徳の涵養すべき資料を與へもって皇国に奉仕せしむる」[21]を目的に開催したという。

この時期、日本経済は恐慌から脱却し、「家庭の主婦や職業婦人といった都市新中産層の女性の消費生活や社会活動も活気づき」、家の外へと向かう意識や行動の変化が起こっていた[22]。「婦徳」を重視する軍部の望む姿とは異なる生き方を志向し、新しい価値観を持った女性たちが現れてきたのである。

以上のように、小松と陸軍・義済会は国防強化、国家隆盛のために、女性た

---

[20] 大島健一「挨拶」『日本婦道講座』第1巻、婦女界社、1935、2頁。
[21] 同前。
[22] 永原和子・米田佐代子『おんなの昭和史』有斐閣、1986、59～61頁。

ちに「真の日本婦道」を涵養する「精神教育」を強化することが必要であるという点で一致し、婦道講習会が構想され、開校の運びとなったのである。

Ⅲ　婦道講習会各回の概要及び実践方法

ここでは、現在判明している35年から41年までの婦道講習会各回の概要を示し、次いで講習員の１日を具体的に見ていきたい。

１　各回の概要

第１回の募集人員は100名、期間は35年５月14日から７月17日まで、午前午後隔日で講義を行う。正味36日間で、約45名の講師が50科目を教えた。応募が殺到したが「試験をするわけにもゆかず」、「聖和学苑を拡張して志願者全部に入学を許可」した（『大阪毎日』35・５・３）。最終的には247名（内聴講員49名）となった。服装は、銘仙の着物より「上のもの」は禁じている。銘仙は格式の低い、安価な着物である。また、「神戸、堺、静岡、愛知、熊本などから上京」した者が10余名いた（『読売』５・15夕）。

講習員の学歴は女学校卒者が多く、中には津田塾、女高師卒者もいること、予備役・現役の中将や大佐の令嬢などがいること、聴講員は中将の妻たちが多いといったこと等が実名で報道されている（同前『読売』、『処女の友』35・７）。

開校式では、君が代、会長大島中将の挨拶、陸軍省今井人事局長の祝辞、小松の挨拶などが行われた。次いで中井による「国防と女性」の講義があった（『日本婦人』35・６）。期間中には、講義・実習の他、農業大学農園の実地見学（『婦女界』35・９）も実施されている。

修了生は、「世界における日本婦道精神を体得」「一家の主婦として必要な数々の知識と技能を獲得」し、「理想的の花嫁の折り紙を付けられ」「方々から結婚の申し込みが殺到した」（同前『婦女界』）と、「花嫁」として必要な知識・技能が得られ、結婚への道が開かれることが報じられた。

第２回は、36年４月16日から６月30日まで42日間開催された（『日本婦人』36・４）。講習員は226名、内容は「一層濃厚なる非常時局を反映」して、「質実剛健主義の徹底、日本婦道の発揚に力を注ぐ」他、「日本国防と日満支関係」「国防問題と女性」など「国防婦人会的常識要目が盛られ」たとされている（『東京朝日』４・17夕）。６月30日に修了式が行われる。「大半はとっくに予約すみ」と、第１回と同様に結婚に結び付くことが示された（『東京朝日』36・７・１夕）。

第３回は37年４月16日より５月31日までの開催。実講日数は概ね31日間である（『日本婦人』37・４）。講習員120名、聴講員30名が募集され（『東京朝日』２・23夕）、約150名が入学した。海軍から４名が入学している。また、九州、朝鮮、満州からの入学者がいることが報じられている（『東京朝日』」４・16）。東京朝日新聞の本社見学が行われている（東京『東京朝日』４・29夕）。

『財団法人義済会二十年史』（1939年）では、第４回までの期日と人数が記載されている。第４回は38年４月から５月（20日間）、講習員81人とある。

第５回以降については『陸海軍軍事年鑑』（軍事会館出版部）に掲載されている「財団法人義済会」の項で知ることができる。第５回にあたる39年から42年まで、義済会の事業の一つとして「日本婦道講習会の開催」が記載されている。しかし、期間、人数などの具体的な情報は記されていない。一方、『東京朝日』（41・４・６）によると婦道講習会は、一時「事変の為中止」し、41年に第５回を開催（４月15日－５月17日）と報じられている。これによれば、39年、40年は開催されていないことになる。同記事による第５回の内容は、「常識的な政治、経済、国防、教育、衛生等日常生活に必要な全般にわたる問題を含みまた家庭園芸、按摩術等の実習」である。

２　第２回婦道講習会の報道記事に見る実践方法

仏教系の総合雑誌『大法輪』の記者が第２回婦道講習会の１日を取材し、「陸軍花嫁学校の一日」（『大法輪』36・６）と題した記事をまとめている。こ

れをもとに学寮に寄宿した講習員（10人）の生活を中心に、「日本婦道を体得した花嫁をつくりだす」実際の方法を見ていきたい。

- 当番の寮生が鳴らす銅鑼の音で起床。
- エプロン姿で手拭いを被り、寮の掃除開始。床の間や本箱の塵を丁寧に払い、畳の目に沿って箒を使うのも３か月の尊い課程。次に長い廊下の掃除。手縫いの雑巾をキュッと絞って、鏡のように磨く。
- 洗面所で髪と顔を直し、着替え。
- 寮生一同仏間に集合。小松は仏間が家庭生活に精神的な潤いを与えること、仏壇の大切さなどを話す。
- 小松と仏前で朝の礼拝（般若心経、勝鬘経（しょうまんぎょう）の十大受章）。
- 朝食　食前食後に合掌。
- 登苑した講習員は直ぐに講堂に入り、指定された席に着く。正面に仏壇が設置。200人余りが静かに開始を待つ。
- 講義は９時から開始。午前中２つの講座。
  紀平正美博士「皇道と婦道」（１時間半）。皆がノートを取る。次に及川警部が実社会の種々相を講義。
- 昼食
- 午後は染色（浴衣染め）の講義と実習。実習では、慌てた講習員の所作を小松が諭す。
- ４時40分終了、解散。当番の菫組（20名）が講堂を掃除。エプロンを付け、手製の雑巾を使用し、器具・床、下駄箱まで丁寧に掃除。
- 寮でも掃除開始。
- 夕べの祈りの後に夕食。
- 22時就寝。

粛然として受講し、自ら縫った雑巾で一心に隅々まできれいにする掃除を行

う。とりわけ寮生に課せられた銅鑼の音で起き、掃除、朝晩の読経・合掌といった生活は修行のようである。その合間に、生活に密着した小松による「機に随った薫陶」もなされ、様々な側面から宗教的・精神的な修養、身体的訓練が行われている。

このような実践方法の特徴を、小松は「皇道精神一本調子ではなく、仏教精神を裏付け」た「作業教育」と説明している。小松は「作業教育は生きた生活の中に仏教を入れたもの」であり、特に「掃除を厭はない、皇道精神と云ふものの実際に目覚め、お便所掃除もする、何でも国家のご奉公になるんだと云ふ自覚」を講習員全員が持つようになった、と特に掃除による精神的効果をあげている。(『大法輪』36・3)。

Ⅳ　婦道講習会の課目と中井・小松の「日本婦道」論

1　課目

次に、婦道講習会の具体的な課目と内容を考察する。第1回講習会の内容を収録した義済会編『日本婦道講座』全6巻が婦女界社から出版された。講習会終了直後の7月20日に早くも第1巻が発売される。理由は、内容が豊富で、「我国婦道の振作」に「稗益する所大」であると信じ、「広く世間に普及」することにした[23]、と説明されている。各巻に掲載された課目は、表1の通りである。括弧内は講師である。

講師陣は、教育者、文筆家、文化人、マッサージ、活花、料理といった多彩な分野の専門家であり、著名人も多い。また、陸軍関係者の名が見られることが特徴である。高楠、倉橋惣三、高島米峰、児玉九十、吉田静致、矢吹慶輝は学芸院の講師でもある。小松、中井の担当した講義録は下線を引いてある。

[23]　前掲『日本婦道講座』第1巻、前付3頁。

表１　『日本婦道講座』に掲載された課目と講師

第１巻

①国体の真髄と家族制度の本義（松本重敏）　②国防と女性（中井）　③皇道と日本婦道の眞義（小松）、④日本女性と外国女性（平田正判陸軍中佐）　⑤西洋思想の梗概（高島米峰）　⑥女性と教養（里見弴）　⑦社会の表裏に対する認識（及川常平・警視庁）　⑧家庭に於ける子供の導き方（倉橋惣三・東京女高師）　⑨礼儀作法（聖和学苑・婦女界社編纂　大妻コタカ女史著『禮儀作法』による）

第２巻

①日本精神の眞義（入澤宗寿・東京帝大）　②勤皇精神と日本女性（小松）　③現下の国際情勢と日本の地位（若松只一陸軍中佐）　④母性の力（下田次郎）　⑤女性と体育（戸倉ハル子・東京女高師）　⑥主婦の理科学知識（金井紫雲・都新聞）　⑦衣類の整理と洗濯の秘訣（山下栄三・東京府立第五高女）　⑧実用家庭マッサージ法（坂本貢・東京高等鍼灸医学校）　⑨趣味の活花（小沼朗月・帝都橘会）

第３巻

①東洋思想の梗概（井上哲次郎）　②文芸と人生（菊池寛）　③人格の完成と宗教（高楠順次郎）　④聖徳太子の御理想と一乗精神（小松）　⑤民間に於ける婦人運動の批判（中井）　⑥家庭経済の秘訣（嘉悦孝子・日本女子商業学校）　⑦趣味の家庭園芸（今川清次・東京農大）

第４巻

①孝悌の道（吉田熊次・国民精神文化研究所）　②夫婦相和の要諦（吉川確悟・陸軍）　③青少年の家庭教育に就て（児玉九十・明星中学）　④女性美の涵養（松平俊子）　⑤婦人の心得ねばならぬ法律常識（新見義夫）　⑥婦人の社会奉仕（中井）　⑦婦人と新聞（千葉亀雄）　⑧女中の使い方と指導法（嘉悦孝子）　⑨室内装飾と活花（小島専甫・大和斑鳩御流）　⑩家庭に於ける和洋服の裁縫に就て（牛込ちゑ・東京女子専門学校）

第５巻

①明治天皇と和歌の道（千葉胤明・御歌所寄人）　②女性としての人生観と齊家の要諦（吉田静致）　③婦人と社交（今井邦子）　④日本女子教育の要道（小松）　⑤婦人と俳句（日比野正之・太白堂）　⑥絵画・彫刻の鑑賞の仕方（日名子實三・陸軍省）　⑦書道の話（尾上紫舟）　⑧家庭に於ける衛生心得（三好・岡田陸軍三等軍医正）　⑨冬から春へかけての和洋支那料理（秋元花香・東京女子美術学校）

第６巻

①国史と国文学に就て（中村孝也）　②宗教の大要（矢吹慶輝）　③冠婚に就ての知識（伊藤観次郎・大禮會舘）　④葬祭に就ての知識（河野四方作・元陸軍事務官）　⑤家庭に於ける衛生心得（二）（三好・岡田）　⑥婦人のみの衛生（豊田秀造）　⑦茶道の話（早川松閑齊・千家表流）　⑧家具・衣類・什器の知識と鑑識（白木屋・松坂屋）　⑨家庭向の西洋料理とお菓子の作り方（若林群子）

出版案内によると、内容は４分野から構成されている（『東京朝日』35・８・17）。

第１に国体、日本精神、婦道精神等の日本人として知るべき事、第２に宗教、思想、教育、法律、国際問題等の社会常識、第３に子供の育て方、礼儀作法、洗濯、裁縫、手芸、女中の指導法、料理等の実際知識、第４に文芸、茶道、書道、絵画等の趣味の知識である。

将校家庭の女性が身につけておくべきと考えられている規範、知識、教養、技能が示されている。１、２にあるように、技能中心ではなく精神的、思想的な課目が多いのが特徴である。

日本女性としての生き方を認識し、子育て、家政全般を最先端の知識のもとに遂行する。和食，和裁だけではなく、洋食、中華、洋服の作り方の技能や文学的・美的教養をもち、礼儀作法を心得、交際もそつなくこなす。家庭を趣味

よく整え、女中を置くことが前提とされているなど、将校家庭の階層性が示されている。

下線で示したように小松の講義数が4回と最も多い。次いで中井の3回である。中井（1887-1953）は陸軍省恩賞課長の任にあり、国婦の趣意書、綱領などの作成、組織化に関り、「創設功労者」とされていた[24]。婦道講習会の理事も務めており、陸軍の望む「日本婦道」論を述べていると考える。両者をみることにより、婦道講習会が目標とする「日本婦道」を浮き彫りにできよう。

2　中井良太郎大佐の「日本婦道」論

まず、中井による講義の内容を見ていこう。

（1）「国防と女性」（第1巻②）

本講義は、「序論」「史的考察」「理論的考察」「将来的考察」の4つの柱で構成されている[25]。

中井は、「序論」で国防とは「国際生存競争場裡に処し、国外と国内の敵に対し国家国民の生存を全うし其福祉を増進し其の正義を貫徹すべき一切の施設を謂ふ」という定義を示し、ただ外敵に対する事業を整えるだけではなく、自国の内も整えなければならないと説明する。そして、日本の軍隊は、天皇（現人神）の統率のもとにある皇軍であることを強調し、「肇国の大理想を貫徹するため」に、内外の敵から国体を護るのが国防の意義であるため、女子もまたその責務があるとする（72-73頁）。

中井は、女性の第1の責任として母役割を強調する。「史的考察」で、洋の東西、古今を問わず、一国の興亡に女性の力が「潜在」していたことをあげる。

---

[24]　大日本国防婦人会総本部『大日本国防婦人会十年史』1943、口絵6頁、80頁。

[25]　「序論」以外は、33年9月に発表された中井による「皇国婦人の自覚より生まれた大日本国防婦人会に就て」という国婦に関する論説とほぼ同じである。同前、31～40頁。

そして、まず、「我が民族精神の結晶たる神代の歴史は、実にわが国女性の精神史である」と「弟橘姫様のご殉国、神功皇后の御征韓、樟姫や大葉子や上毛野の形名の妻の悲壮な決意など」（74頁）と、神話に出てくる女性たちの戦での功績を列挙する[26]。

しかし、中世以降も「婦人精神は伝統一貫」しているとしながら、「大楠公夫人、細川忠興夫人」などの史実を始め、「維新史の表面裏面の勤皇女性史から、日清・日露戦争以降」「満州事変まで、裏面に動く母の力の偉大さ」があると女性自身の力ではなく「母の力」へと変化する。「母の力」を重視する理由は、「陛下の御為国の為喜んで死すという将兵の精神は母の力」によるためである。日本女性の護国の役割は、まず、「よき子を生んで之を忠良なる臣民に仕立て、喜んで国防上の御用に立て其の任に精進せしめ」ることにあるとする（75・80頁）。

第2に、「精神的にも物質的にも其の後顧の憂いを除くやう家事を整へ、又家庭経済を確立して国家経済に寄与する」ことと、主婦として台所を守る役割を果たすことが国家的役割になるとする（80頁）。

第3に、皇軍兵士とその遺家族を労り、世話する事業が不足している状況であるため、「優しく正しく然も強き母性愛よりする慰謝後援は、如何に皇軍兵士気を鼓舞し、如何に将兵の遺家族を喜ばしめること」（81頁）かと、出征兵士の家庭や遺家族の世話という銃後活動の意義を説く。

第4に、どのような事態にあっても勝利への強い意志を持つことを求める。第一次大戦でドイツが敗れた重大な原因の一つに、生活が窮乏し、子供たちが栄養不良となり倒れていくのを見て、「独逸婦人の気力が挫けた」ことをあげる。このため「ドイツは遂に内より崩るゝの悲運となり、敗戦となった」の

---

[26] 千野陽一はこれらの記述を「国婦における軍部指導者層による日本神話に登場する古代女性の理想化傾向」と分析し、他の婦人団体とは「異質の指導理念」「ファッショ的婦人観」を表すものと指摘している。千野陽一『近代日本婦人教育史』ドメス出版、1980、295～296頁。

であり、「ドイツ婦人の二の舞を演じないようにすべき」と、女性も「国民皆兵」の精神を強く持つことが勝利のカギとなると力説する（76頁）。

さらに、中井は、一旦緩急の場合には、いかなる悲惨な状況にも耐え、男子が担っていた国の務めに服し、究極の場合は「古代女性軍隊」と同様、「男子に伍して戦線に立つ」といった場合に対処すべき決意を持たねばならないと訴える（82頁）。

最後に、講習員が「将来日本の母性の模範となり」、「皇国に奉仕することを希望」すると締め括る。

（２）「民間に於ける婦人運動の批判」（第３巻⑤）

中井は、各種運動を思想面から、「国家主義徹底の為の運動」（愛国運動、報国運動）、「社会改良主義の運動」（社会生活の不合理を国家の利害に関係なく除去する運動または国家や社会の力で除き是正改良する運動）、「社会革命主義の運動」（共産主義運動など）の３分野に大別し、これらの運動に潜む天皇制に対する危険性を指摘する。とりわけ、「社会革命主義の運動」は「皇室の尊厳も存在も」認めないため「絶滅すべき」と手厳しい。その理由は、我が国は皇国であり、「天皇即国家」「君民一体」のため、国内の大改革や大維新は皇室を戴いたからこそできたのであり、「大権の御発動なくして国民が勝手に為し得るべきもの」ではないからである（260-261頁）。

さらに男女の特性論に基づき、女性の役割は「男子の活動に対する女子の内助」と「内助」を重視する中井は、女性が男性と同じ政治活動をすることは考えられないことであり、婦人参政権運動を「婦人の本領に反する」と批判する。また、労働運動を行う場合は「その天分に合する」立場をとること、奉仕運動もやり方によっては「亡国運動」になると警告する。最後に「君国に対し婦人の道を誤るような運動」には参加してはいけないと釘をさす。以上のように、現体制・天皇制の動揺をもたらす社会運動への警戒感、女性が社会運動を行うことへの否定的姿勢を示した（269頁）。

（3）「婦人の社会奉仕」（第4巻⑥）

中井は、奉仕事業には国家奉仕と社会奉仕があり、「忠君愛国」などから発する国家奉仕を優先すべきと、国家を利することに価値をおく。そして、ここでも女性の本分は「内助」であるとし、女性の社会奉仕はその「本分に鑑み」「身分相応のことを為して然るべきもの」「婦人の力でなければ出来ぬ又其の方がよいといふ事業」をできる範囲で行うことが大切とする。そして、行うのなら「自分及び自分の家と社会との接触面」から始めることを勧める（215-217頁）。

次に、「私共軍人を中心として」考えて、「最も顕著な」婦人奉仕団体として陸海軍将校婦人会、国婦、愛国婦人会、大日本連合婦人会及び各種宗教婦人団体、女子青年団をあげ、活動内容を説明する。この中で特に陸海軍将校婦人会について、家庭を治める修養を行う団体であるべきなのに、「その使命本質を脱逸し」、社会事業を行っていることは「大いに考慮を要する」と批判していることは興味深い。1906年に創立された本会は皇族妃を総裁に、将校子弟のための寄宿舎の運営、和裁の授産所、献金や寄付などの社会事業を行っていた[27]。中井はまず家を治め、その後に夫の部下の家庭を労わるといった「近き」活動をするべきであり、将校家庭の女性は家を守るのが本分であることを説く。これに対して国婦は、まず、自分の家を治め、「近隣の遺家族や、傷痍軍人を労り、以て全国的に及ぼさんとする」「護国のための国家奉仕の団体」であり、急速な拡大を遂げている状況を「皇国の一大強味」と高く評価している（219-220頁）。

以上のように、中井は歴史的にみて、女性にも国防役割があるとする。その役割の中心は、家（台所）を治め、天皇に忠良な強い子供を産み育てる母役割を果たすことである。さらに、必要があれば、母役割を超えて戦うことも是としている。そして、国婦が最も望ましい活動を行う婦人団体であるという認識

[27] 『日本文化団体年鑑　昭和18年版』日本文化中央連盟、1943、40頁。

を示した。

3　小松の「日本婦道」論―「皇道と日本婦道の眞義」を中心に

小松は、「皇道と日本婦道の眞義（本文では本義）」（第１巻③）、「勤皇精神と日本女性」（第２巻②）、「聖徳太子の御理想と一乗精神」（第３巻④）、「日本女子教育の要道」（第５巻④）の講義を行っている。通読すると「皇道と日本婦道の眞義」でほぼ論点は出されており、他と重なっている部分が多い。そのため、「皇道と日本婦道の眞義」を中心に、その主張を６点に整理して考察する。

（１）現人神である天皇が指導する日本

小松は、まず、皇道精神は日本の建国以来、「大道として我民族の血肉の中に活ける生命」であると、皇道精神を持つことの重要性をあげる。

しかし、明治維新の黎明とともに西洋の文物―科学思想、物質文明、主知主義、個人主義など―を急激に生活に取り入れたため、影響を受け、問題も起きている。特に「思想問題、教育問題など精神的な方面」は考えなければならないと欧米思想がもたらした影響をあげる（87頁）。

そして、「天照大神のご詔勅、天業恢弘の大精神により神の道を地上に立てるということが日本の国の道義立国の根本精神」であり、日本は「神意によって肇められた」「皇道をもって治める国」であると、神話から説く（105頁）。日本全体が「神の理想を実現する、地上に建設するための建国であり、民族」とする。皇道とは天皇が自ら実践する「御道」であり、これに対して臣道がある。民を指導する現人神である天皇のもと、臣民は臣道の実践者であり、「皇室という大きな家庭の中にある家族」であると、皇室をいただく家族主義国家観を示す（116頁）。

（２）臣道を体現した大楠公（楠木正成）

小松は、人々は「日々の生活勤労のすべてが奉公精神によらなければ」なら

ず、それが臣道であるとする。そして、皇道精神の「中枢」は忠孝であると説く（118頁）。

その皇道精神を最も体現している人物として、小松は大楠公（楠木正成）をあげ、「日本精神の権化」「臣道の全分を果たされた偉人格」と讃える（108頁）。南北朝時代、大楠公は南朝の後醍醐天皇に仕え、息子正行に天皇に忠を尽くすことが孝になるということを遺言して、討死。息子正行も後に戦死した[28]。

（3）「日本婦道」を代表する女性―静寛院宮、楠公夫人、貞明皇后

小松は、鏡と玉と剣の三種の神器は「個人道徳の根源、皇道精神の道徳的生命」であり、「智、仁、勇の三徳」を表しているとし、三種の神器から導き出される婦徳は「優、正、剛」としている（123頁、137頁）。

この三徳を表す女性として、特に静寛院宮を褒め称える。

静寛院宮は、孝明天皇の異母妹で、孝明天皇より和宮の名を賜る。幕末、公武合体策のため第14代将軍徳川家茂に降嫁する。1866年家茂が逝去したため落飾、静寛院宮と称した。夫の死後も江戸にとどまり、徳川家存続に尽力した。小松は、天皇家、国家、嫁ぎ先の徳川家を守った静寛院宮を「皇道、臣道、婦道と三道を全うされた偉人格」、「智、仁、勇」に優れ、「優、正、剛の精神」を立派に実践したと称賛する（124頁、163頁）。静寛院宮は当時広く知られていた存在で、例えば、『日本女性鑑』（1935年）では、「日本女性の最高典型」と形容されている[29]。

静寛院宮とともに称賛しているのは、大楠公の妻、正行らの母である楠公夫人である。「臣道の精神と大和魂、忠義が婦道に現れた」と大楠公とともに臣

---

[28] 楠公父子は明治以降教科書において「忠臣の鑑として最大限に利用され」、35年には大楠公六百年祭が挙行された。谷田博幸『国家はいかに「楠木正成」を作ったのか』河出書房新社、2019、69頁。329頁。

[29] 大日本連合婦人会・大日本連合女子青年団共著『日本女性鑑　上・下』大日本連合婦人会、下巻、486頁。

道の観点からあげる。勤皇の大義を会得した楠公夫人がいたからこそ夫は殉じた。そして、天皇に対する「忠君報国の大精神」を息子に受け継がせ、戦死させた楠公夫人を「母性道の権化」と賛美する（162頁）。

楠公夫人について小松は、「勤皇精神と日本女性」でより詳細に述べている。楠公夫人は、「夫正成なき後の孤忠を守って幼児を養育し、一族を統べ」「生涯を南朝に捧げて忠孝貞の三道を全うし、母としての大任を果たした」と経歴をあげ、「茲に日本精神も、皇道精神も、勤皇も、武士道精神も、家庭精神も、婦道も、総べてが神々しく成就された」「我国の家庭教育の根本もここに」ある。「真の日本女子教育の目的は完全なる人を作るにある、日本臣民として恥ずかしからぬ人を成就する」（63頁）にあると、臣民を育てる母役割が最も重要な役割であることを訴える。楠公夫人も『日本女性鑑』に収録されている[30]。

さらに小松は、大正天皇の皇后である貞明皇后を三徳を実践した「日本臣民の国母」と賞賛する。

小松は聖和学苑を設立した理由を、貞明皇后への報恩を具体化するためとしている。1923年９月の関東大震災時に小松は重傷を負い、入院するが、その病院に貞明皇后が行啓し、小松に見舞いの言葉をかけた。震災の大変な中で、出向いて、「臣民を御仁愛」され、一婦人まで御言葉をかける御聖徳を感じ、日本女性の真の光明を拝した。そのため「健康を回復し、女性としての勤めを果して、せめて満分の一、皇后陛下のご仁慈に御応答」申し上げたいとの思いを持ち、「奉公の誠をさゝげさして頂くという自覚に立ち帰った」とする。体が回復した小松は、女性には「臣道婦道の自覚」が必要なのに、現代の自分たちの生活に当てはめると、それだけの自覚をもってなしうるかどうか、慙愧に絶えない、何とかして「奉公の一分を果し」「日本婦道」のために貢献したいと

---

[30] 前掲『日本女性鑑』下巻、１～30頁。夫人は、近世から、女訓書の類において頻繁に取り上げられ、明治期以降も「忠」「孝」の女性として教科書で扱われた。太平洋戦争下では「銃後の婦人」の模範としての色彩を強めていく。住友元美「大正期における楠公夫人顕彰と女子教育」羽賀祥二編『近代日本の歴史認識』吉川弘文館、2018、227～250頁。

考え、聖和学苑を創立したと述べている（165-169頁）。

貞明皇后は、４人の皇男子を産み、病弱な夫を公私にわたり支え、慈善事業に熱心に取り組み、新聞紙上で「国母陛下」と呼ばれるようになる[31]。震災時には自ら被災各地への視察・慰問を積極的に行った。また、夫を看取る際、休まず看護を続ける態度は「婦道の亀鑑」（『読売』26・12・18）とされた。皇太后となっても、宮中、軍部、国民にとって、その存在感は大きかった[32]。

（４）「理想国土」建設と仏教

小松は、日本書紀にあらわされた神武天皇の建国精神である「養正、積慶、重暉」の三大綱をあげ、このような偉大な思想をもって国を始められたのは、「宇宙に於て日本以外にない」と日本を賛美し、他国に比べて天皇を戴いた優れた国であるとする。こういう国を完成して、世界人類全体が営みを遂行していくことができるなら初めて本当の平和、「仏教で謂ふ、真の浄土が建設される」とする。浄土とは「理想国土」ということである。仏教と皇道が一体となって説かれるとともに、日本を神国とし、アジア侵略と植民地支配を正当化する論理が示されている。この「理想国土」完成のため、奉公し、死すことをも厭わない姿勢を引き続き説く（131-133頁）。

また、「日本婦道」への仏教の影響も唱え、聖徳太子の功績へと続けていく。

（５）聖和精神および聖徳太子が導入した勝鬘経と「日本婦道」

小松は古神道でいう「和魂（にぎみたま）」や推古天皇の時代に摂政を務め、仏教による国造りを行った聖徳太子による17条憲法第１条「和をもって貴し」をあげ、「聖なる理想に和す」という意味で聖和という語を用いているとする。すなわち、「皇道の聖徳に和して、忠誠をはげむの和、婦人が至誠の人格徳操

[31] 片野真佐子『皇后の近代』講談社、2003、118～119頁。
[32] 原武『皇后考』講談社、2015、473～580頁。

にめざめて和す、優なる心、そうした意味で、和といふこと、聖なる理想に和すというので聖和」ということを長年称えてきたとする。そして、日本精神は大聖和精神であるから、「国徳としても婦徳としても、家庭道徳としても聖和精神である」と古神道および聖徳太子（仏教）信仰、皇道精神の三点から女性の規範として「和」の重要性を強調し、学苑の名称を説明する（139-140頁）。

そして、小松は「聖徳太子の御理想と一乗精神」で聖徳太子が「日本仏教の源」を開き、「皇道に於ける日本婦道の確立」をもたらした、と説明する。

具体的には、「日本婦道」のあるべき姿を「勝鬘経の精神に依って、宣明された」のである。寮生が１日の始めに唱和していたのも勝鬘経である。

勝鬘経は法華経、維摩経とともに聖徳太子が仏教の経典の中で最も優れた大乗経典として選び、注釈書を著した経典である。選ばれた理由は「女性の勝鬘夫人が主人公で、女性推古天皇のためにふさわしかった」ためである[33]。日本書紀によれば、推古天皇第14年に聖徳太子は天皇に請われて、３日間かけて勝鬘経を講じられた。

小松いわく、勝鬘経は女性の大乗経典として「法華経の理想を実生活に宣明した経典」であり、阿踰闍国の王妃である勝鬘夫人の修養とその極致を示したものである。勝鬘夫人が在家のまま「如来の勝法を受けて、仰せのまゝに修行し、やがて仏心を成就して普光如来となる」物語となっている。修行によって夫人が「釈尊の教えを聞いて守ろう」と自ら行うために立てた十大受章には、戒めを固く守る、慢心を起こさない、怒りの心を起こさない、嫉妬を起こさないといった自己を制す教えや貧窮者を助けるといった他者に尽くすことの重要性などが10か条にわたり女性の修養指針として示されている。勝鬘経によって、聖徳太子は「婦人の成仏の因を具体的に」教えられ、推古天皇に「日本婦道精神の要道を明に」したのである（229-240頁）。

さらに、小松は勝鬘経を「最も古けれども最も新しき近代婦人精神の軌範」

---

[33] 『仏教大事典』小学館、1988、343頁。

であり、近年様々な家庭問題を起こして岐路にまどっている女性の道は、聖徳太子の理想に復帰してさらに新しく近代に更生せねばならないとして、その教えは新しい時代にも通じるものであるとしている（245頁）。

勝鬘経は日本における仏教の経典として、とりわけ女性のための経典として重要であることは多くの者が指摘している[34]。また、高楠は、仏教における理想の女性は勝鬘夫人のように「真実の慈悲を発揮」するものであると、夫人を称賛している[35]。

（6）「母性」から「母心」へ

最後に、小松は「母の道の完成、母性道の輝きは、女性が一生をかけた生命の大芸術」であると、「母性」の重要性をあげる。そして「真実なる家庭の完成」が女性の使命であり、「そこに女性の絶対なる人格を建設することこそ日本婦道の本義」と家庭を守る役割をあげる。そして、今後の「日本婦道」は「皇道精神を基調として、教育勅語を奉戴し、新しき科学、文化を摂取し、宗教信念を根底とした道であるべき」と結んでいる。皇道精神、仏教精神と共に新しい知識をもって家政にあたることを説いている（183-184頁）。

「日本女子教育の要道」でも女子教育は個人主義的なものではなく、必要なのは「皇道精神としての人格主義の教育」と皇道精神の重要性を繰り返す。そして、「母心」という概念を打ち出す。それは「人の子の母になったら母性」、エレン・ケイやフレーベルのいう「家庭を中心とした母性」という狭義の意味ではなく、「真に至誠の人格に目覚めた、何人も慈しみ育てる暖かい母心」「そこに迄至ることが真に母性に目覚めたと」言えるのであり、その立場の「母性教育」が必要とする（179頁）。例として、貞明皇后をあげる。「公の国母陛下として臣民を愛撫遊ばされる其の御精神、神の如き仁愛、宗教的愛であります

[34] 例えば、佐伯貞胤『勝鬘経講讃』渾沌社、1939年、３～５頁。
[35] 前掲『高楠順次郎の教育理念』、80頁。

皇道精神が、国全体のすべてのものに真実と真愛とを以て指導され」るのであり、そうして「純粋な第一義的な母性」にまで女性（母）は目覚めていかなければならないという。最後に再び「婦道の精髄こそ母性の自覚」「麗しき者よ汝の名は母性なり」と締め括る（183頁）。

以上のように小松は、日本女性の模範として社会に知られていた、静寛院宮、楠公夫人、貞明皇后をあげ、特に楠公夫人を通じて、家を守り、臣民としての子供を育て、天皇制に尽くす生き方を説いた。そして、勝鬘経を「日本婦道」の根底とし、仏教の重要性をも示した。また、「母性」の重要性をあげ、貞明皇后のように、わが子への「母性」からさらに、何人にも慈愛を注ぐ、そして皇道精神に満ちた「母心」へと昇華させることが重要であることを唱えている。

おわりに

婦道講習会の開催が判明している第５回までの経緯および具体的な実践方法を明らかにし、中井と小松による「日本婦道」論を考察した。以下、４点まとめておく。

第１に、婦道講習会を組織し、運営していく上で、小松の力が大きかったことが指摘できる。学芸院の教育内容は婦道講習会の原型と捉えることができよう。そして、小松の指導力が講習員らの教育に発揮されている。また、小松と陸軍との繋がりや迅速な講師選定の背景には高楠の持つ幅広い人脈の力もあったと考える。

第２に、婦道講習会の課目の特徴は、精神的、思想的な内容が多いことにある。御茶の水家庭寮と警察官婦人協会家庭学校では、「修身および公民科」がおかれ、その他に前者は国学（源氏物語、論語）、後者には「国際事情」といった科目もあるけれども、両校とも最も時間数が多いのは家政に関する技能科目（家事、裁縫　料理、家庭科学など）である。

また、仏教精神に基づく「作業教育」も特徴である。小松は、「掃除」とい

う作業を通じて、仏教精神および皇道精神を体得していく過程を示した。

第３に、陸軍及び中井と小松に共通しているのは、西欧化に伴う物質主義や個人主義の拡がりを憂い、天皇の神格化と国体観念を強調していることにある。

このような主張の背景には、日本精神が叫ばれ、軍部による天皇機関説排撃から国体明徴運動へと展開していく政治的状況があったと考えられる。『日本婦道講座』第１巻の冒頭に置かれた松本重敏博士「国体の真髄と家族制度の本義」では、天皇主権説を強く打ち出している。

第４に、中井と小松のいう「日本婦道」の中心は、臣民としての意識を強くもち、国家の土台である家（家庭）を守ること、とりわけ天皇に忠良な臣民たる子供を産み育てることで天皇に奉公し、天皇制および戦時体制を支えることである。そのために特に「母性」の涵養を強調している。具体的には、社会運動や活動には関わらず、あくまでも家（家庭）中心に生き、近代的な家政や子育ての知識と技術を身につけ、皇道精神をもつ良妻賢母像が示された。さらに、小松は勝鬘経が「日本婦道の要道を明らかにした」とすることにより、仏教の重要性および天皇制と深い繋がりを持つことも強調した。

一方、中井は、戦争の最終段階では女性は戦闘に加わる事もいい、勝利するためには「母性」を超えることも厭わない、陸軍を支える女性論も展開した。

以上のような皇道精神と「母性」を中心とした「日本婦道」論は戦争が激しくなる中、ますます強調され、良妻賢母に女性たちを意識づけしていく。しかし、実態は中産階級の女子青年も勤労動員の対象となり、家庭の外へ出ることが促される。そして、1943年に、勤労動員計画のために文部省は「花嫁学校」を「不急学校」の一つとして整理の対象とする（『読売』43・５・４）。これにより、良妻賢母主義教育の矛盾が現れた。

婦道講習会の研究は、女子社会教育の場において展開された、国家権力による矛盾に満ちた女性掌握の論理が示されていると考えられる。

さらに「陸軍花嫁学校」の経緯、他の課目の内容分析を進め、この問題に一層迫ることを課題としたい。